

## 「リチャード・グリーンウの滑稽な物語」

### — 非合理的人間観の表現 —

朱 宮 晴 三

ハックスリーの短篇小説集は1920年から丁度10年間に5冊を数え、個々の作品数は26篇に達している。従来の批評ではこの可成りな数の短篇は、長篇がしばしば論じられるのに対して、余りかえりみられず、個々の作品の事情は殆んど解明されていない<sup>(1)</sup>。こうした事態は、彼の短篇が長篇に比し価値が著しく劣るという認識が批評家達に明確にもたれていたというよりも、むしろハックスリーの特質は長篇においてより明確に現れ、したがって、捉え易いことから生じているように思われる。例えば彼の博識家の面はスペースの自由な長篇によりよく發揮されており、*Point Counter Point*(1928)はその特異な形式のみならず盛り込まれた知識の多彩さによつて彼の代表作とみなされ、多くの批評の対象となつてきた。彼はまたG.S. Frazerのいう'a workable faith in the bewildering world'を探究するモラリストであり、その探究の過程は(エッセイは別として)長期間にわたつて発表された長篇を年代順に検討することによつて最もよく捉えられ、現代文学史家達は彼の幾つかの長篇をとりあげて第一次大戦後の幻滅と懐疑から'life-worship'の思想を経て今日の神秘主義に至る彼の思想遍歴を語るのが常である。探究の過程を見出そうとする限り、すべて初期に書かれ懐疑的傾向を示すに止つている短篇は検討の対象となりがたい。さて、ハックスリーの短篇の検討は、それが相当の量に達している以上、彼の小説作品の全貌を知る上に必要なことはいうまでない。そしてまたその検討は、容易にわかるように、それが、小説論的にみて、長篇にない一面を具えている、あるいは、むしろ長篇にある欠陥を

示していないことから意味のあることである。ハックスリーの長篇の形式上の特徴は、所謂'novel of ideas'の性格にあるとされ、批評家は機会ある毎に抽象観念の過剰と具体的人間像の稀薄さを指摘し、多くは非難している。いや、ハックスリー自身がすでにそことは意識し、*Point Counter Point*に登場する小説家フィリップを通じて自ら指摘しているところである(XXII)。ところが、一読して明らかなように、そうした観念小説的傾向は短篇には認められず、その点に関する限り、短篇が長篇よりも秀れていることになる。J. Brookeは「短篇がハックスリー氏の小説(fiction)への寄与のうちでは最も成功しているものである」とする多くの批評家がいることを共感をもつて紹介しているが<sup>(2)</sup>彼の言葉から察して、彼らが短篇を大きく評価する前提にはそれが観念小説的偏向をもたないことがあるように思われる。最終的判断において長篇よりも短篇を上位におくことには、内容からみて、大いに疑問があり、私自身は反対である。だが短篇には抽象観念に邪靡されぬ人間像がある事実は、ハックスリーの小説作品全体を考える場合、評者の目を長篇のみならず短篇にも向けることを要求している。この意味でも短篇の検討は無視できないのである。今回は虚女短篇集*Limbo*(1920)の巻頭に収められている「リチャード・グリーンウの滑稽な物語」(*Farcical History of Richard Greenow*)を考えてみたい。

この作品は第一次大戦中に狂死した一青年の身の上を描いたものであるが、テーマとなつているのはベンミステイックな人間観であ

る。作者ハックスリーはその人間観を直接的には主人公ドイツの大学卒業後における社会主義運動の経過を語るうちに示している。ところでこの作品の最も特徴的なことは何といつてもドイツが精神的な意味での男女両性者(Hermaphrodite)即ち、二重人格者になつてゐることであろう。そのことは作品に異常心理学的な興味を与え、風変わりな効果をもつプロットを生み出している。がドイツの異常性格の履歴はそれだけの役割を果すに止つてゐるのではない。それはテーマの人間観を象徴的に表している点でも重要である。このことを知ることは「リチャード・グリーンウ」の構成上の統一を把握する上に欠くことができない。今一つ注目すべきは本来ベシムステイツクなテーマを、ハックスリーはドイツにある距離をおくことによつて、喜劇的雰囲気の中に表現しえてゐることである。こうした諸点に留意しながら作品をみてゆきたい。検討の中心はテーマの人間観表現ということになる。

便宜上男女両性のプロットから始めよう。それは自ら作品全体の梗概にふれることになる。

「これはパブリック・スクールで無神論と芸術を、大学で社会主義を発見し、学位取得後、性と梅毒のさげがたき時期を経てから25才にして成熟した光彩を放つ小説家になるような、惻愴な若者についてのコンベンショナルな物語ではない。それ故私は難しい思春期の些細な出来事は省いて、我々の主人公の将来に光を投げかけるような点にのみふれようと思う。」(P.5)

このように第一章が始つて間もなく、作品のアンコンベンショナルな予告しながら、作者はパブリック・スクール時代のドイツを暗示的な同性愛事件によつて紹介している。ドイツはプリパラトリイ・スクール時代もそうであつたが、特に数学をよくする。'prodigy'で数人の秀才仲間の頭となつていた。ところが彼らと交際しながら常に一歩の不満

足感を拭い切れぬ。それがある日突然に級友のクォーリス少年(Quarles)に恋をすることにより満足されたような気になつた。そして奇妙なことには、一度そうした気持ち陥ると急に仲間が疎ましくなつたのみならず、放心状態に陥り数学が全くできなくなり、たゞロマンチックな詩を書くばかりの有様となつた。この時はその発作は三週間ばかりで治り、ドイツはそれを脳貧血のために一つの固定観念がつかまつたのだと自己診断を下し、健康に留意して再発を防いだ。しかしこの診断が不十分なものであることは卒業式の出来事によつて示されている。当日、ドイツは他の生徒達の母校に対するセンチメンタルな態度に批判的な気持ちで式に出席するにもかかわらず、晴衣をつけて校歌を唱うクォーリス少年をみると、妖しく胸が躍り、遂には興奮のあまり泣き出してしまふのである。常人であるならば、如何に校歌のメロディに心を揺すぶられたとしても、同性の友人をみて泣き出すということはありません。ついでにいうと、プリパラトリイ・スクール時代にドイツは妹の人形の家で異常な興味をよせてゐる。これも一つの暗示である。この同性愛事件の真の原因が明らかになる時期を、作者はドイツのオックスフォード在学中に記している。即ちドイツが学寮で一夜小説に手を染めてみると、その小説は昼間の意識的な彼が知り知らぬ別人の手によつて書きつゞけられ、でき上つたものは顔の赤らむ程センチメンタルで通俗的なものである。とにかく出版社に送つてみると、その内容から彼は女流小説家とみなされる。こゝで始めて彼は自己が精神的な意味での男女両性者であることを自覚する。つまり夜毎に小説を執筆する通俗的な女性的分身が自己のうちにいることを、そして以前クォーリス少年に恋したのも同一の女性的分身であることを自覚する。その後女性的分身パール・ベレアーズ(Pearl Bellaire)は経済的にはドイツを支援するが、結局は彼を破滅に追いやることに

なる。オックスフォード卒業後社会主義運動に身を投ずるドイツの生活費を賄うのは、ベレアーズの夜毎にもものする通俗小説であるが、第一次大戦と同時に彼女は激励なショーヴィニズムを唱え始め、ドイツの平和主義と烈しく対立する。そして彼女は彼の疲れを狙つては昼間にまで活動するようになる。勿論彼はこうした事情をひたすら隠す。しかし反戦運動の科で裁判に附され、その結果、ある農場で労役についている時、ベレアーズが表面に現れ、男性の彼の口を借りて自分は女流小説家であると公言する。彼は精神病院に送られ、そこで最後には同時に男女の人格に分裂しながらその短い生涯を閉ぢる。

以上が男女両性の二重人格の面からみた主人公ドイツの生涯である。これはたしかに先の作者の予告通り、アンコンベンショナルであり、物語的な面白さ——初めあり、中あり終りありの面白さ——を充分具えていることが理解されよう。ここで、この風変りな、明らかに「ヂーキル博士とハイド氏」に着想をえている<sup>(3)</sup>、二重人格物語には、ハックスリーの心理学的知識が巧みに援用されていること——例えばドイツが第二人格になるのは心理的、生理的原因によるのであつて、ヂーキルの如く変身薬をのむ必要はないこと、またその第二人格は女性であること<sup>(4)</sup>——は注意しておく必要がある。なぜならそうした寄妙さと学識を盛りこんだ物語は、彼が *Crome Yellow* で代弁者を通じて主張している

'realistic novel'の小市民生活の克明な描写から解放された物語('erudition'と'fantasy'の物語)<sup>(5)</sup>の実例に他ならないからである。またその主張は、この二重人格物語と共に収められている、往時の愛敬家(philarithmic)の物語<sup>(6)</sup>、フロイド学説応用の恋愛劇<sup>(7)</sup>、恋人を月の女神と思ひこむ男の物語<sup>(8)</sup>、そして勿論 *Crome Yellow* 中の諸エピソード<sup>(9)</sup>、においても実践されており、そこには、出発に当つて既成作家ゴールズワージーやベネットのリアリズムとは異質の文学性を

狙つた、彼の作家的姿勢が明瞭に読みとれるからである。

テーマとなつている人間像をみよう。

「...資本家であろうと社会主義者であろうと、ドイツ人であろうと英国人であろうと、すべて人間は動物 (beasts) である。善人は百万人に一人しかいない。」

(P.110)

主義主張、人種にかかわらず人間は所詮動物であつて理性的乃至道徳的存在ではない——これがドイツが死の直前に書き記す人間についての結論であるが、作者の人間観が色濃く映し出されている。それはペンミスティックな非合理的人間観ともいふべきものである。ドイツがそうした認識に達するまでの彼の大学卒業後の社会主義運動の過程を辿つてみよう。ドイツは、具体的には、進歩的な週間紙 *Weekly International* の編集員となつて資金と原稿を送り、労働運動も指導することによつて社会主義運動に加わるが、その動機はといえば「彼の周囲に起る世の中の恐ろしい出来事は明らかに胸がわるくなる程悪い事態を改善すべく、彼に全力を注ぐことを要求しているように思われた」(P.44)という使命感である。元来内向的な性格で(彼の性格は妹ミリセントの実際的な性格と対置されている)、学究生活に入りたい気持も強かつた彼であつてみれば、この使命感は相当なものであつたといわねばならない。当初しばらくは運動と、それと平行的に行うことにした学究生活との、両面にわたつて満足な日々を送るが、第一次大戦が始つて反戦運動に参加する頃になると、ドイツは次第に運動に没入できない自己を見出すようになる。(同時に学究生活も停頓する。)非合理を発見し始めるのである。彼は先ずそれを自己のうちに明確に意識する。反戦運動のため設立された平和主義者クラブの会合に出席した時、そこに集つた進歩的な人々、更に、一般大衆に対して、彼は押え難い嫌悪感を覚えている。

「何と正義の観念は明快ですばらしいこと

か。若し汚染をひきおこす人間的要素 (the contaminating human element) をろ過しることができるものならば . . . 。理性は自分にデモクラシー、国際主義、革命を信ずることを命ずる。しかし理性も道徳もいささかも自分をして民主主義者や革命家との交遊を楽しませないし、また、被圧迫者個人々に対する自分の嫌悪感を減じはしない。」(P.81)

ドイツが嫌悪感を覚えるのは、教養の相違あるいはそれに基く趣味の相違、洗練度の開きによる。彼がクラブに 'Sclopie' なる微妙な語感の名前をつけようとしても彼らには理解できない。彼らは「怪しげな」食物を「怪しげな」食器で盛んに食べ、ある婦人会員は未来派ばりの色彩の調和を無視した服をきている。戦争、国際労働者同盟、高貴なもの、美しいものについての彼らの「正当な意見」も彼らの発音を通じて出されると「恐ろしく安手で間違つたもの」に聞える。とにかく意見は正当であり、普通の意味では無教養とはいえぬクラブの会員に関してこの有様であるから、一般大衆については推して知るべしである。理性の命ずる社会主義の理想を実現するために、自らの貴族趣味、審美趣味から生ずる嫌悪感を克服して、クラブの会員や一般大衆に溶けこんでゆけぬ自分のうちに、ドイツは「汚染をひきおこす人間的要素」即ち非合理を見出しているわけであるが、それは実践運動の際常に問題になる高等インテリのエゴイズムである。彼はそれに打負ける自らを省みる時、自らを「人非人 (bloodsucker)」と断せざるをえない。

「ドイツは早く到着した。ドアに近い自分の席から会員の入ってくるのを彼はみていた。彼には彼らの服装が気に入らなかつた。気がついてみると彼は『中産階級』ということを知っていた。良心がそのことで彼を責めると、彼は中産階級、下層中産階級、下層階級は好きにはなれないことを認めざるをえなかつた。彼は疑もなく心の

底では人非人であつた。多分教養もあり知性もあるが、それにもかかわらずやはり人非人であつた。」(P.77)

しかしひるがえつて考えてみれば、ドイツが他者に嫌悪感を押えがたいのは、単に彼のうちにあるエゴイズムによるのではない。彼は他者のうちにも抜き難い非合理を認めているのであり、それが彼の嫌悪感を決定的なものにしているのである。例えば彼の徴兵反対の講演を薄暗いホールや礼拝堂で熱心にきく人々を

「人類全体の福祉にはいささかの関心ももたず、ひたすら自らの魂の救済や自らの良心に殺人の痕跡を残さぬことに腐心している奇妙なキリスト教徒や平和主義者達」(P.72)

とドイツは観じている。彼らの平和愛好もつきつめれば彼らのエゴイズムだというのである。一般大衆にあつては事態は更にわるい彼らは、反対するものは論外として、ドイツの講演に強く賛成しても、それは束の間のこと、すぐまた「かきまわされた蟻の巣が元にかえる」(P.73) ように元の黙阿彌である。彼らの無知または怠惰は敵いがたい。上記のドイツの嫌悪感の原因は、彼のエゴイズムもさることながら、こうした他者の非合理にもあることを見落してはならない。ドイツは後に農場で労役についている時にも人間の非合理を証する出来事に遭遇している。単純さに問題があるとしてもその社会主義への情熱の故に、ドイツが尊敬しつづけてきた *Weekly International* の編集長がある日農場にやつてきて、ドイツが裁判で示した反社会主義的言動をなじる<sup>(29)</sup> が、丁度その時来合せていた彼の妹と識合うと、彼女が積極的な戦争協力者であるにもかかわらず「四週間後」に結婚してしまふ (P.96f.)。編集長の本能の要求は彼の主義、主張よりも強力であつたのである。またドイツは農場労務者の中へ入つてゆこうとしても、彼らは彼を耳馴れぬ、訛のない発音をする他階級の者と

して憎悪し、村の教師は所属階級の保護をはなれたデイツクを国賊と子供達に喧伝した。(P.90f.)。

以上のようにデイツクは社会主義運動の過程のうち人間が様々な非合理に打負けている姿を発見し「人間はすべて動物である。善人は百万人に一人しかない。」との結論に達している。「自分は善人ではなかつた。我がままなインテリであつた。」と自己の非合理も痛感しながら。勿論彼は社会主義運動を否定しているのではない。資本主義制度の悪は是正されねばならないし、いつかは是正されるであろう。「自分はこの戦争を、すべての戦争を悪とみなす。それはキャピタリストの戦争である。悪魔はいづれは粉碎されることであろう。」(P.110)しかしたとえ制度が変わるとしても、人間の非合理性は変わらないのではなからうかというのがデイツクの観測である。「この世はいつまでも地獄であろう」(P.110)とはそうした意味においてである。

先にふれたようにこのデイツクのベシムステイツクな人間非合理観は作者ハックスリー自身のものであるが、同時にそれは第一次大戦のショックをきっかけとして、B.ShowやH.G.Wellsの社会主義、あるいはヴィクトリアニズムに含まれるオブテイミステイツクな合理主義、進歩の観念への深刻な反省として生れた一つの時代思潮でもあつたのである。このことはハックスリーが1928年にあるところ<sup>(4)</sup>でいつている言葉が端的に物語っている。彼は合理主義、進歩の思想の祖ともいべき18世紀啓蒙思想家の諸観念を、「高貴にして感動的な夢であり、醜陋気分としては推賞すべきものであつた」と揶揄的に評しながら、次の如く続けている。

「我々は今では酔がさめている。我々は一理性は万人に等しく与えられているのではなく、本能が行動の唯一の源であり、偏見は議論よりもはるかに強く、20世紀においてさえ人々はアルトラミラの洞窟やグラストンベリーの湖畔住居の時代と同様に

振舞つていることを知つたのである。」

ハックスリーは、出発以来、第二次大戦を間近に控えた1930年代中頃に、人間の非合理性を認めながらも、人間は神秘主義的瞑想によつて自己変革のできるものである、という宗教的人間観をうる<sup>(2)</sup>までは、このベシムステイツクな人間観をもちつづけており、その正に最初の小説的表現を「リチャード・グリーンナウ」においてなしているのである。

それではデイツクの二重人格のプロットが、風変わりな効果を生み出す以上に、テーマの非合理的人間観をどのように表現しているかをみよう。二重人格は人間の合理、非合理の葛藤を象徴的に扱うのに便利なものである。大抵の場合二重人格における第一人格と第二人格とは対立的なものであり<sup>(3)</sup>、前者が合理を表すとすれば後者は非合理を表すことになるからである。しかし合理的な第一人格と非合理的な第二人格とが相争うということを取りあげても、そのこと自体はここでいう非合理的人間観即ちベシムステイツクな人間観に達しないことは明らかであろう。第一人格が最終の勝利を得るならば、それはベシムニズムではない。そこで二重人格の物語が非合理的人間観の物語となるには、まず、第二人格の非合理が勝利をえていなければならない。

「リチャード・グリーンナウ」は正にその条件をみたしている。デイツクの第二人格ベレアーズが非合理性で特に問題となるのは、大戦が始り、合理の平和主義を主張するデイツクに対し、非合理のショーヴィニズムを彼女が唱えて鋭く対立するようになつてからであるが、窮極的には彼女がデイツクに勝っている。即ち彼女は大戦勃発の報にデイツクが極度に興奮すると、彼に代つて昼夜5日間にわたつて活動し、ショーヴィニズムの記事を新聞に寄稿し(P.61f.)、その後も彼の反戦運動をししばし中断せしめている(P.73f.)。殊に彼女はデイツクが'conscientious objection'で法廷に立つた時には、彼の口から平和主義を裏切る言葉を吐かせて面目を失わ

(X章の始め)、更に死に際しては、ドイツよりも強靱で彼より後迄意識を保ち、資本主義戦争を否定する彼の遺言を抹消して、烈しい反動的な言葉を書きつけている(P.112 f.)。ドイツは重大な時期にベレアーズを抑圧しえず、敗れ去つていたのである。しかしこのように非合理的な人格が強力で勝利をえているとしても、なお、それだけでは非合理的な人間観を表現するに充分でない。「デーキル博士とハイド氏」をみよう。たしかにこの作品では最後には非合理的な人格ハイドが勝利をえている。が、衆知のように、その表現するところは決してベシミズムではなく、逆に積極的なビューリタンの人間観である。読者はそう解するのに少しも抵抗を感じないのである。その理由は合理的な人格デーキルの敗北のさせ方にある。即ちデーキルが敗北するのは自己のうちにある遊樂を求める気抑えを、自らの意志で変身薬を度々のむことにある。これは逆にみればデーキルはハイドを、道徳的克己心によつて拒否し、打勝つ可能性が与えられていることなのである。この可能性をみる故に、読者は、作者ステイヴンソンは「デーキルを侵略者(悪)に対して抵抗しえなかつた輕蔑すべき裏切り者とみなしている<sup>44)</sup>」ことを理解し、彼の人間に希望を失わないビューリタンのモラルを明瞭に会得するのである。それ故に、再び「リチャードグリーンナウ」にかえつてみると、ドイツのベレアーズに対する敗北が非合理的な人間観の表現に達するには、それが勝利の可能性を残されていぬ徹底したものでなくてはならない。ハックスリーは恐らくこの事情を意識し、深層心理の知識に助けを求めながら、ドイツの敗北を必然的なものにし勝利の可能性を抹殺している。ドイツが敗北するのはデーキルとハイドの場合と異つて、決してベレアーズ的なものにみ力を覚えるからではない<sup>45)</sup>。彼の意識の緊張が肉体的、心理的疲労によつて弱まると、そこに無意識のベレアーズが飛出すのである(Of.前出箇所)。そしてドイツ

は敏感な神経の持主で疲労に陥り易い人物として設定されている以上(Of.P.78 P.84)危機における彼の敗北は必然的である。

次にこの作品のもつ喜劇的寡困気に移ろう。作者ハックスリーは標題において「話(History)」に「滑稽な(Farcical)」なる語を附している。彼はここで自分が、主人公ドイツに対し距離を保ち、冷静な喜劇作家の態度をとろうとしていることを読者に宣言しているわけである。そして彼のそうした態度は事実、作品中幾つかの点に現れている。ドイツが、すぐ後で身の破滅の原因となるべき自己の男女両性の性格を発見した時、それは昼間の金にならない学究生活を夜ベレアーズのものとする通俗小説が経済的に支えることになつて「理想的状態」だと喜ぶこと(P.38)、そして彼の良心的活動たる社会主義運動も同じく彼女の小説によつて支えられねばならないこと、これらにドイツの二重人格のプロットを利用した喜劇的皮肉である。個々の場面では、例えば、ドイツが大戦勃発を知つて急遽スコットランドからロンドンに帰つた時、興奮の余り顔面が痙攣を起し、それをみた通りすがりの子供に「あの人の顔どうしたの、母さん？」といわれる場面(P.56)、その後気を落ちつけるためにブランデーをのむと空腹にこたえ、千鳥足になり慎重に歩を運ばねばならない場面(P.56f.)、彼が精神病院に入れられ、抗議をしようとして

"Pray, may I ask...."といひ始めるべきところを"Pray, I ask, may...."といひ損じ詰つていると、医者はその'may'を自分を女性としてドイツが呼んだものにとり違え、ドイツの病は重篤とする場面(P.105f.)などは笑いを誘うものである。これらはこの作品が単調なベシミズムに陥ることを防いでいる。

ところでそうした喜劇性を取り入れるためハックスリーがドイツに対し距離を保つていことは、実は一面、ある危険を招くものであることが理解される。というのは、その

距離が確乎たるものであれば即ち作者の 'detachment' が徹底したものであれば、ディックは作者に支持されぬ人物であるとの印象を読者に与える可能性が生じ、そうなれば彼がテーマにかかわる非合理発見の大役を荷なうことが困難になるからである。そこでハックスリーはディックから 'detached' した位置に身をおきしばしば喜劇を発生させながらも、根柢においては彼に 'attached' していることを読者が知りうるよう筆を進めている。例えば、先にみたディックが平和主義クラブの会合で他者に嫌悪感を覚える場面は彼の高等インテリ的エゴイズムを示し他者の非合理を暗示する、重要なものであるが、そこではディックに対して作者は少しも皮肉を加えず、彼の嫌悪感に打負ける故にディックが陥る自己嫌悪（「彼は...人非人であつた」）が一時的なものではなく本物であることを「きれいな手、きれいな手。私は自分の手をきれいにできない。できない。できない。私はあらゆるものを汚なくしてしまふ。」とマクベス夫人流の言葉を、死の直前のディックに吐かせて、示している。このことによつて作者は（一面ではディックのエゴイズムの根強さを物語るが）ディックの自己の欠陥を卒直に認める限りでの良心性、彼の自己観察の正しさを示し、更に他者の観察の正しさを読者に保証しているのである。要するにハックスリーはディックに根柢においては 'attach' し、彼を頼りうる、人間非合理性の発見者として描いているのである。

喜劇的雰囲気は脇役的人物によつても醸し出されていることを附加しておこう。レポートの評語に語彙不足を露呈する数学教師、足が短く下唇が垂れているのにギリシャ的肉体美と自惚れるギリシャ語教師、ディックが自らの 'Memento Mori' とした、大学時代には秀才であつたが一向うだつの上らぬ先輩、仔馬の如く威勢がよく、ストライキをもつて大学当局の学生取締りを弛めさせるディックの妹、 'ever-ready irony' をもつて人を

まごつかせる校長婦人など。彼らは直接に作者によつて、あるいは、ディックの目を通して描かれるが、何れもカリカチュア的なおかしみを生み出している。

以上テーマの非合理的人間観を中心にして「リチャード・グリーンウ」をみてきた。最後にその表現について一つ欠陥を指摘しておきたい。作者が風変わりな二重人格のプロットをもつて巧みにテーマを象徴していること、そのベシミスティックなテーマを、ディックとつかずはなれずの関係に立つて、喜劇を発生させながら語りえていることは上述した通りである。が、ディックの社会主義運動の経過を語るうちに示されるテーマの具体的表現については問題がある。即ち読者はディックの非合理性、つまり、彼の高等インテリのエゴイズムとそれに伴う嫌悪感は実感することができるけれども、他者の、殊に一般大衆の非合理性は十分な具体性をもつては描かれず、殆んど報告的に知らされるにすぎない。結局、巾広い他者との接触は作者には未經験に属していたというべきであろう。

#### (註)

- (1) 最近出た C.J. Eschelback と J.L. Shober 共著のビブリオグラフィ (*Aldous Huxley, A Bibliography 1916-1959*) をみても、出版当時の新聞評位しか短篇を直接の対象としたものはないようである。本邦のもので私がみたのは、紹介程度のものであれば、今田進造氏の「"Parical History of Richard Greenow" の精神分析」(北九州大学外国語学部、紀要工、1959)と元田一氏の『ジョコンダの微笑』(「短篇小説の分析と技巧」、開文社、昭和34年)の二つである。
- (2) Cf. *Aldous Huxley*, P. 14. しかしその「多くの批評家の意見」も文章化されてはいないようである。
- (3) P. 37 と P. 82 の二箇所にてーキルとハ

- イドの名が出ている。
- (4) 通常異常心理のテキストには二重人格者の実例が幾つかのついている。また男女両性説は同性愛の如き性対象倒錯 (*inversion*) の現象を説明するのに何人かの心理学者、精神病理学者が唱えている (Cf. フロイド著「性に関する三つの論文」中の「性対象に関する偏倚」の章)。ハックスリーはこれにヒントをえたものと思われる。今田論文はヒントの出所をユングの *anima* (男性内の無意識的な女性面)、*animus* (女性内の無意識的な男性面) 説に限定しているが、その限定は必要なからう。
- (5) Cf. P.150f. の Scogan の言葉。
- (6) *Eupompus Gave Splendour to Art by Numbers* 画家ユーボンパスは数を唯一の実在とし、その表現を追求するうちに発狂したという。
- (7) *Happy Families* 二人の恋人のそれぞれの *id*, *ego*, *super-ego* を擬人化し、葛藤させている。
- (8) *Cynskia*
- (9) 例えば Scogan の語る人間人工孵化や 'the Directing Intelligences, the Men of Faith, and the Herd' の三階級に別された未来の国家 (the Rational State) の話。(これは後に *Brave New World* (1932) へと発展している。) また人間の高貴さを忘れないようにと、居所を住居の最高部に配し、下界を見下しながら、そして、聖賢の書を繙きながら用を足そうとした Sir Ferdinando の話。
- (10) これは実はベレアーズがいうのであるが、デイツクはたとえ説明しても理解されまいとの気持から弁明しない。後述の両者の関係を参照。
- (11) *Along the Road*, P.108f. Cf. 'Work and Leisure' (*ibid.*)
- (12) *Eyeless in Gaza* (1936), *Ends and Means* (1937) に示されている。
- (13) Cf. 村上仁著「異常心理学」, P.160
- (14) G.B. スターン著「ステイヴンソン」 P.23, 日高八郎訳, 研究社
- (15) デイツクはベレアーズを抑圧しようとして死になり、友人に精神分析的治療を求めるが無駄であつた。 Cf. P.63f.